
誰も忘れてなんかいやしない

ガムベース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰も忘れてなんかいやしない

【Nコード】

N5380M

【作者名】

ガムベース

【あらすじ】

友人の部屋で、私は、本を読む友人の絵を描く。それから、そこにいないはずの、少女の絵を描く。私は目の前のやぶれたソファをガムテープで直そうと思いつくが、部屋に入ってきた友人の姉が、ガムテープではなく、継ぎをあてて、ソファの穴をふさぐ。

膝ほどの角テーブルの向かいにある、皮が破れてスポンジが見えているソファをテーブル越しに、足でつつき、返す足で積んであったノートの山を崩す。私のノート。窓際の丸机にコップを置いて、本を読んでいた友人が、素足でテーブルを荒らされたことに対して抗議の目でこちらを見たが、そのときすでに私は足を引っ込めていた。自分のソファの下で両足を揃えて行儀よく座り、鉛筆を持ち直して、消しゴムを、崖崩れを起こしたノートの下から掘り出して、ノートの上に置いた。私は絵を描いている。友人の、本を読む姿を、ノートに写生している。私は、消しゴムは滅多に使わない。線も切らない、同じところに何本も引く。友人の本は三百頁のハードカバーで、友人は左手を本の背に添えて、右手で見開きの頁の小口を軽く押さえて読む。やや長い前髪が眼元に影を落としている。色白の彼の肌、その場所だけが薄暗い色をして、光が瞳に届いているのかどうか心配なくらい暗く、まつ毛まで長くて、いつ見ても線が多くて、誰かに似ていて、指が震える。

友人の向かいに、一人の女性の姿を、描き加えた。私の想い人。やせ型で少年的な、平坦な体系、髪におどろくほど艶がなく、色素が抜けたみたいに灰色染みていて、それを眉の真上で真っ直ぐ切りそろえている。鼻の頭に、小さな黒子がひとつ。口元はいつも微笑している。デニムのハーフパンツから伸びた足が、丸テーブルの下で泳ぐようにうごめき、友人の女性的な足とぶつかって、そのたびに友人が顔をしかめる。女性はぽっと頬を赤くして、足をたたむように椅子の下にしまう。私は鉛筆を走らせて、彼女の足をテーブルの下に描いた。友人の足とぶつかって、彼が本から一瞬、顔をあげる場面がノートの上に染みた。それぞれ種類の違った、中性的な雰囲気を持った二人が向かい合う、いつか見たような光景。

それから、穴のあいた向かいのソファに、彼女を座らせた。彼女

は私に向かって笑いかけている。菓子皿から煎餅を一枚つまみ、そうして私の名を呼んで、おいしいね、とつまらぬことを言うのだ。彼女の指先にはさまれるものは、あるときはトランプのカードだったり、将棋の駒だったり……とにかく、彼女の向かいの、いま私の座っているこの席には、いまと同じように私がいて、私も彼女を見つめて笑っている。しかし、私は自分の姿を描いたことがなかった。だから紙の上の彼女は一人だ。友人と彼女が向かい合って描かれたその隣に、小さく描かれたソファの上の彼女は、右手を軽くかかめた仕草をするだけで、その指先には何も持っていない。

やがて友人は本を置いて、冷たい水の入ったコップを取り上げた。丸テーブルにコップの跡がついている。友人は静かに水を飲んだ。向かいのソファのスポンジが、相変わらず露出していて、いまにもこぼれ落ちそうで、隠してやりたくなる。私は鉛筆を置いて立ち上がった。不意にドアが開いて、友人の姉が入ってきた。私はとっさに挨拶をする。やはり、あの人と比べて随分大人だ、色気を隠さないところなど、特に。姉は清涼系の香水のにおいを振り撒きながら、私に向かって「お久しぶり」と言い、続いて「大きくなったわね」と言った。浸食されたような気がして、私は座りたい気持がしたが、堪えて、愛想笑いをした。姉も笑う。友人はいつの間にか本の頁に目を戻していた。何食わぬ顔で本の続きを読んでいる彼に向かって、ガムテープはどこか、と訊くと、彼は本に指を挟んだまま無言で立ち、机まで歩くと、引き出しからガムテープを出して放つてよこした。

友人の姉が不思議そうに尋ねる。「それ、どうするの」

「ソファを巻くんです、傷口をふさぐんです」貴方の弟が、ひどく乱暴に扱っているのだという非難を込めて。

「ちょっと待って」と、彼女は一旦部屋を出、すぐに黒い漆塗りの木箱を抱えて戻ってきた。「これですぐ直るわ」とにっこり、私の彼女がいつか浮かべたものと、そっくりの笑顔で言った。

彼女はその箱から針と糸を取り出して、厚手の布をあてて、ソフ

アを縫い始めた。「見た目は元通りにはならないけれど」と、手元から、いきなり私の顔に目を移した。彼女のまつ毛は自前だ。それなのに、瞳が隠れてしまいそうなくらいだった。よく見ると、思ったほど彼女の顔には、化粧っ気がない。さっきまでどうして曇っていたのだろうか。「そんなもので修繕するより、ずっといいよ。テープじゃあんまりよ」

みるみるうちに穴は塞がり、新しい皮膚ができた。あれほど哀れだった傷口は、誰かの穿き古しだろうか、デニムの生地で覆われていた。一目見て不釣り合いな当て布が、かさぶたのようで、私は剥がしてやりたい衝動に駆られたが、嫉妬だと気づき、止めた。

「ずっと塞がないままだったのね、あの子」本を見つめ、聞こえないふりをしている友人を見て、姉はつぶやく。

「そこは、いまは彼が座るんですか」

「いいえ」微笑し、俯いて、小さくかぶりを振った。「誰も座らないわ。ずっとそのまま。座れなかったのよ、私も、あの子も」

彼女の目が私のノートにとまった。そこに描かれた少女の絵を見て、彼女の目から涙がこぼれた。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380m/>

誰も忘れてなんかいやしない

2010年10月8日14時20分発行